

宮沢賢治の環境世界

佐島 群巳

The Ökumene of Miyazawa Kenji

キーワード 環境世界(Ökumene) 人間存在 風土 空間性 時間性 人間愛 農民芸術 羅須地人協会 自己同一性

プロローグ——なぜ賢治か

宮沢賢治は、短い生涯を燃焼しつくして、多くの作品を残した。彼の生きた環境世界は如何なるものであったろうか。

1996年、宮沢賢治は生誕百年をきっかけに、賢治の生きた時間と空間から、彼の思想と生きる力に遡源し、人間の在りようを探求してみたい。

それは、今日のかかえている人間存在の危機としての感性の喪失、ヒューマンイズムの衰退が呼ばれているからである。21世紀を生きる私達は、賢治の生きた環境世界をみつめ、賢治の人間らしく「生きた根源的な感性・認識・思想」に照明し、「いま、ここにある (here and now)」自己存在の価値を発見し、生かす契機を得たいと考えたからである。

1 環境世界の意味

(1) 環境世界とは何か

環境世界とは、エクメーネ(ökumene(独)、écoumène(仏))という。人間の居住が、時間空間に規定されながらも、その人間は居住環境の中で、相互に矛盾関係をつくり、自らその矛盾克服、止揚し、生きる環境を創り出すことをエクメーネという。エクメーネという概念は、極めて主体と対象との相互作用による構成される総合的な性格と機能を持つものとする。

私は、大学3年の時(1951)に辻本芳郎教授の「経済地理学方法論」の講義で、地域論のキーワードとして、ökumeneという用語に初めて出会い、新鮮さを感じた。当時のノートに「ökumeneとは人間生存する空間であり、人間存在を規定する」ものだと記してある。

エクメーネの論説は近年目にとまるようになった。それは、和辻哲郎の「風土—人間学的考察」や今西錦

司の「生物の世界」、オギュスタン・ベルグの「地球存在の哲学—環境倫理を越え」にエクメーネの意味論的考察がなされているからである。

エクメーネは、生物の生きる場であり、生物学的には環境的特質の中で自然との相互依存関係をなして、共生という環境世界をつくっているのである。今西錦司は、次のように述べている。

われわれの世界が空間的即時間的な世界であることは、その世界を成り立たせているいろいろなものが構造的即機能的な存在様式をとるものであるといつてよい⁽¹⁾。

この考え方は、今日の環境問題について考える場合においても適用できる論理である。たとえば、生物であれ、無機物であれ存在過程は、生物同士、生物と無機物とか相互に規制し合い、作用し合っているからである。

エクメーネは、地球それ自体である、とオギュスタン・ベルグがいう。その場合、人間を抜きにエクメーネは考えられない、と次のように述べている。

今日のエクメーネとは地球それ自体なのだ。ただしそれは、私たち人類の存在を抜きにして考えた、単なる物体ないし生態学的実体としての地球ではない。エクメーネはあくまでも私たちの住んでいる地球である⁽²⁾。

また、ベルグは、エクメーネを風土ともいっている。

風土論を早い時期から論究したのが和辻哲郎である。和辻哲郎は、名著「風土」の序説に、ベルリンに留学した1927(昭和2)年に、実存哲学者ハイデッガーの「有と存在^(註)」に出会った時から、ハイデッガーの人間の在り方について注視し、疑問をもって見つめ、次のように論じている。

人間の存在の構造を時間性として把握する試みは、

(注) マルチン・ハイデッガー (Martin Heidegger) の「存在と時間 (SEIN UND ZEIT)」は岩波文庫(上・中・下)三部として桑木務訳で出版されている。

自分にとって非常に興味深いものであった。然し時間性がかく主体的存在構造として活かされたとき何故同時に空間性が同じく根源的な存在構造として活かされて来ないのか、それが自分の問題であった⁽³⁾。

和辻は、こうした疑問を持ちながら批判的に風土性を考える契機となった。まさに時間性のみでなく人間の根源的存在構造に空間性が活かされないか、と『生きる自然』が新しく蘇生してこそ人間が存在する考えたのである。

和辻は、風土においてその現象をモンスーン型、砂漠型、牧畜型の三つの風土型に分類している。風土は人間の主体的表現であり、時間を離れて存在しないし、時間はまた空間を離れて存在しないのである。まさに、時間と空間とは相即不離の関係性を有するのである。

アジアモンスーンの風土を有する我が国は、温潤気候で自然の暴威を身体で実感し、人々は自然の力に忍従的な生き方をしてきた。一方、近代化の過程は環境に働きかけ、環境の可能性を切り拓いてきた。ここに風土論と環境可能論との間に人間生存に矛盾相克をもたらしているが、21世紀は、この克服の道を探していかなければならない。

(2) 宮沢賢治の環境世界

オギュスタン・ベルクがいうように風土の現実的表現として人間は、生存する環境世界を形成しているのである。これは和辻の「空間と時間が明らかにされる時、人間の連帯性の構造も亦その真相を呈露する。人間が作るさまざまな共同態、結合態は一定の秩序に於て内的に展開するところの體系である⁽⁴⁾」。空間と時間とは相即不離のように歴史と風土も相即不離の関係をなしている。その場合主体的人間の空間的構造なくして、社会的構造の存在は不可能である。その社会的構造は歴史性に規定され、そして、人間が存在するのである。

和辻哲郎は、人間存在の構造契機として風土性の持つ意味を語っている。「自然環境が如何に人間生活を規定するか」と問うことが大切だ。風土は、土地の気候、地質、地味、景観を総称であり、古代人の自然観として「地水火風」が欲すると否とにかかわらず、現実に我々を「取り巻いている」環境という事実である。

土地の気候、地形、地味、景観などが関連して体験させられる寒風は「山おろし」「からっ風」である。「この寒さを感じる」のは、人々によってこの寒さを共通に感じるのである。

土地柄を示す「地方食」は、人々（民族）が永い間の風土的自己了解の表現である。文芸も、美術も、宗

教も、風習も同様の表現形式をもつものだ。風土の現象は、自然科学的対象と異なり、人間が環境の規定され、また逆に働きかけによる「人間学的な意味」をもつ現象である。

風土の型は、「空間」「時間」の相即不離の関係において、人間の主体的表現として文芸、美術、宗教、習慣が存在するのである。モンスーン的人間構造は、日本人本来の「受容的、忍従的存在」である和辻はいう。自然の暴威（暴風雨、洪水、早魃）に対して人々は「対抗断念」し、「なるようになれ」の忍従的な生き方を導いてきたのである。

ところが、現代社会の人間の欲求、欲望、目的追求によって期待したように「どのようにもなる」という人間の働きにより環境を衰え、その可能性を引き出すのが、現代社会の人間存在の構造契機であるとした。そのことが今日的環境問題としての人間存在の構造契機が風土から今、問いかけられているのである。

宮沢賢治は、今から100年前の社会に生きた人間である。賢治の環境世界の根源的なものは、自然の力の横溢として、敏感な感受性を育む契機（動機）となった。岩手の風土（気候、地形、景観）の中で賢治は『風の又三郎』の二百十日の台風に、『グスコブトリの伝記』の貧農の子ブトリの生き方に、『雨ニモマケヌ』の中で冷害に喘ぐ農民を見守るデクノボウの生き方に、賢治自身の主体的人間の感受性と存在構造が融合し、美事な芸術作品が表出しているのである。

宮沢賢治の環境世界は、風土「岩手」の中に存在する現実的空間性と賢治自身の生をもたらす家族・地域の結合の中での自己の感性と理性の持続的な矛盾相克を孕む時間性との接点に形成されていった。そして、賢治の多くの作品は、そうした人間存在の空間性と時間性の融合したところに「夢」「希望」「愛」「科学」「宗教」「人間らしさ」を包含しつつ創造されてきたものである、と考える。

2 自然の中に立つ「生の源泉」

(1) 鉱物、植物の採集に熱中

幼き日の体験は、生きる原風景を作り、生涯の生きる力を育む源である。幼き日の体験の思い出をめぐらしながら、新しい体験と結合して真の自己形成がなされるものである。

エクリソンが「ライフ・サイクル（人生周期）⁽⁵⁾」において指摘しているように人間は、社会、心理的危機の中に存在している。その危機の克服こそが、人間の成長、生きる鍵である、と論じている。

賢治は、児童期において自然に親しみ、家の周りや

野山の自然に触れながら野外で鉱物を集めることに興味を示した。そして賢治はその自然との出会いにおいて鋭い、敏感な感応力が磨かれていったのである。

後に、盛岡高等農林学校に進学してから土性、地質調査をする基礎となる原風景が児童期に形成されたものと思われる。賢治は、「石ッ賢さん」と家族に渾名されるほど石の採集に熱中した。年譜^(注1)にも「この年、鉱物、主として石を採集、昆虫の標本づくりに熱中す。(1906年) (P433)」とある。鉱物ばかりでなく、昆虫、植物の織り成す自然界に興味と好奇心をもって羽博っていたのである。

まさに、児童期における自然との出会いによる科学的センス、自然観、自然の機微を感じる心の中に彼の環境世界が培われてきたのである。

(2) 自然への感動、大発見

賢治が盛岡中学校に入学するようになり、自然によりそい、自然を愛し、自然から学ぶことがより多くなっていった。

「中学一年生の頃、遠足や郊外散歩に出かける時の彼の腰には、かならず愛用の金錠が一ちょうたばさままれていた。彼の詩によくでてくる七つ森、南昌山、鞍掛山、その他盛岡近在の山や岡で、彼のこの金錠の洗礼を受けていない所はほとんどあるまい。こうして方々から集められた岩石の標本が、彼の机の上や抽出しから押入れの中までいっぱい埋めていた。中学一年生であれだけ石の興味の持てる子供は、古今東西を通じて、あまり類がないかもしれない。(年譜 P440)

さらに、中学校2年には、チフスを病み、9か月も病気欠席のままであった。紫波郡不動村の藤原健次郎への書簡(1910年9月19日付)の末尾には、次のように書かれていた。

ここからも南昌山^(注2)も見える。巖手山も見える。早池峯も見える。どれをこの夏休みに登らうと考へてる。他分早池峯にするだらう。

早池峯は、北上山地にあり、霊峯として知られ、高山植物の宝庫でもある。賢治は、高山植物を根こそぎ盗む者への警告ともつかない、やるせない非情さを詩っている。

(根こそぎ抜いて行くやうな人に限って
それを育てはしないのです
ほんとうの高山植物家なら

時計皿とかペトリシャーレ^(注3)をもって来て
眼を細くして種子だけ取って行くもんです)

この詩はこの二人の対話形式をとりながらさらに続くのである。いきなり冒頭の数節にも「高山植物ドロ」の根こそぎとって行く人たちへの猛烈な批判を述べている。賢治の自然を見る鋭敏な感性というものを読みとることができる。

このあと、次のような対話形式の詩は続く。

(魅惑は花にありますからな)
(魅惑はありますだって)
こいつは随分愕いた
こんならひとつ
袋をしょってデパートへ行って
いろいろ魅惑のあるものを
片っぱしから採集して
それが通れば結構だ
(けれどもここは山ですよ)
(山ならどうだろうと云ふんです)
ここは国家の保安林で
いくら雲から抜けてても
月の世界じゃないですからな
それに第一常識だ、
新聞ぐらゐ読むものなら
みんな判ってるる筈なんだ、
ぼくはここから顔を出して
ちょっと一言物を言へば、
もうあなた方の教養は、
手に取るやうにわかるんだ、
必ずびつと顔色がかはる)
(わざわざ山までやって来て、
そこまで云はれりゃ沢山だ)

この詩を宮城一男は、次のように評している。
一本当にずいぶんひどいことをいわれています。しかし、山を愛し、植物を大切にしている森林主事にしてみれば、高山植物ドロの無教養さにこんな罵声を浴せてみたくなるのでしょう⁽⁶⁾。

賢治は、二人の対話形式で早池峯山の風景と絶滅危惧種の稀少価値野生生物について語っている。ここに登場する二人のうち森林主事とは「賢治」であり、もう一人は「高橋」であろう。高橋とは、盛岡高等農林

(注1) 本文中に掲げる「年譜」とは、すべて「校本宮沢賢治全集」第14巻、築摩書房1977(昭和52)年のものである。

(注2) 本文↑印は誤記・誤植に付している。以下同様である。

(注3) ペトリシャーレはふたのついた円型のガラス容器である。

学校の親友高橋秀松であることが推察できる。高橋とは、机を並べた仲で、しかも寄宿舎も一緒にしばしば山野を跋涉したことが年譜(P.464、472、473)に記されている。

(3) 土地、地質調査で科学の目を磨く

賢治は、1915(大正14)年1月盛岡市北山の教浄寺(時宗)に下宿し、受験勉強に打ち込む。そして同年3月には、盛岡高等農林学校入学試験、農学部第2部に首席で入学した。

関豊太郎は、賢治入学より主任教授として物理、同実験、気象、地質、鉱物、土壌などを講じ、賢治の得業論文(卒論)指導にもあたった。

関教授は、土壌学が専門で1914(大正6)年2月「火山灰土壌研究」で農学博士(今の東京大学)を授与されている。賢治は、得論審査後、稗貫郡土性、地質調査の助手を当らしめ、実験指導補助の身分を保証し、将来は助教授に推す用意を持っていた。(年譜P.466)しかし、1920(大正9)年賢治は退職する。その間多くの土性、地質調査を行ったのである。

主な調査を以下に列挙しておくことにする。

- ・関教授の指導による盛岡附近地質見学・調査(1916年7月8日)
 - ・関豊太郎教授、神野幾馬助教授の指導による秩父、長瀬、三峰地方の土性、地質調査(1916年9月2日から四泊)
 - ・江刺郡地質調査(1917年8月21日～9月3日)この間、岩谷堂、羽田村、伊手村、米里村を訪ね、その体験から、短歌「種山ケ原七首」「原体剣舞二首」を創作
 - ・稗貫郡土性調査(1918年4月)
 - ・紫波郡地質調査、うち7日間小泉三郎助教授と山地森林立地調査、9月、10月中に40日間稗貫郡地質調査、その他はすべて化学実験室手伝(1918年)
- 「このような状態では本も読めず、自分の研究もできず、仕事が終わっても来年から何をやっていいか見当がつかない」と悲観的になる。父からは研究には、忍耐のいることを指摘され、改めて「随処みな忍辱の道場」と心がけることにする。(年譜P.496)

さらに調査が続く

- ・盛岡高等農林学校林学科教官武藤三郎の稗貫郡土性調査に協力(1919)
- ・土性調査、関教授とともに早池峯山麓大迫町に泊る

退職後も東京の西ヶ原試験場(国立農事試験場)で火山灰の研究をすることになる。(関教授退官後、西ヶ原国立農事試験場の嘱託となる)

話をもとにもどそう。特に高橋とよく山へ登っていた。

1916(大正5)年5月「賢さんの思い出(-)」という高橋秀松手記に北上山地探訪したときの風景について次のように述べている。

「北上山地探訪の時は、土曜日の午後から出掛け姫神の下あたりを通って夜道となった。山道は尽きて広い野原に出た。先途に、ポーッと明るい一面に見える言い香りがしてくる。花盛りの鈴蘭群生地帯であった。二人は嬉々として花の上に寝転んで考えた。(中略)土橋の上でねる事にきめていたら川下の方から一老人が現われた。「オメエサンダチ、ナニシテル、こんな処で寝たら狼にやられるぞ、オラノウチサオデンセ」と親切に言葉に導かれて、二人は老人について川上に上ったら、大きな一軒の家があった。」(年譜P.472)

この手記から察するに自然の美しさと人間のやさしさが融合する「天地の美・感謝の心」といった風景を描かれているように思えてならない。

以上のような自然との出会いが、賢治の環境世界に自然への感応力という自然の神秘さ、不思議さ、驚嘆、畏敬、やさしさ、恐ろしさなどを研ぎ澄ましていき、物理的宇宙をこえた生態学的な表象的コスモロジーをつくっていったのである。

3 人間関係の純化と人間愛

「あらゆる人間は本来的に人間的なものではあるが、彼の表現する人間性は、彼が経験したことも時代の習慣に、深く影響されているという事実を意味する⁽⁷⁾。」と、ブルーナーは幼児期における成長という事実は、子どもの一層の深い意味を占めるところの母体^{マトリックス}であるとも述べている。いわば幼児期の成長体験という事実は、生涯社会を生きる根源的な環境世界を形成する「原体験」でもある。幼児期には生きるよりどころとなる家庭における母親、ふるさと(地域社会)は、その意味において人間的な愛と信頼、生活万端に役立つ技法、習慣の基礎・基本を提供する「母港」なのである。

(1) 昔話に見る夢と浪漫

幼児期における体験や教えてもらったこと、昔話の中の夢^{ドリーム}が子どもの好奇心や探究心、想像力を導く原風景をつくってくれる。

賢治の幼き日は、祖母の妹ヤソから昔話を聞く。真冬のよもすがら、膝の上のぬくもりを一身に受けながら

「むがーす むがーす あったずもなー」から始まる昔話に耳をかたむけ、次々と場面の変る早さに胸躍ら

せ、じっと聞きほれる。

「…どんどはりゃ（これで終り）」

賢治は、昔話を毎夜毎夜、繰り返し繰り返し聞きながら、いつの間にか心の中に話に登場する人間と自然のおりなす原風景を想いめぐらしていたにちがいない。おそらく、幼児期に賢治の想像性、創作へのドリーム、その基盤が形成されていったのではないだろうか。

花巻や遠野のあたりには、共通した昔話として「ザシキワラシ」がある。この話は、東北地方の旧家に住むと信じられている家の神様で、小児の形をして、顔が赤く、髪を垂れている。このザシキワラシがいる家は、家運がむき、いなくなると衰えていく、という言葉伝えられている。

「遠野物語」は、遠野を中心とした昔話をまとめたものである。この物語は、遠野の佐々木喜善との交流の深かった民俗学者柳田国男によって紹介された。これがいわば日本「民俗学」の基礎となったのである。

賢治が後年になって、尋常小学校3年、4年の担任「八木英三」について次のように語っている。

私の童話や童謡の思想の根幹は尋常小学校3年、4年のころにできたものです。その時分先生がいろいろお話し下さったじゃありませんか。その時、私はただ蕩然として夢の世界に遊んでいました。いま書くのもみんな、その夢の世界を再現しているだけです⁽⁸⁾。

賢治10歳の時、東北地方は、未曾有の大飢饉であった。農村の疲弊、経済不況は人間の生命をうばっていた。そういう時こそ、昔話の中に夢と浪漫が幼き賢治の心を誠実と愛の心情を醸成していったのである。就中、賢治にとって八木英三先生の影響は大きかったようだ。八木先生は志を大きく、早稲田大学に編入試験に合格して花巻小学校を去ることになる。

賢治10歳のころ「鉱物そして石を採集、昆虫の標本づくりに熱中する」（年譜P.443）とあるように自然の中における自然科学的探究心（科学性）と物語の中の文学的教養（創造性）とが融合するように賢治の精神的な環境世界を形成していったのである。

人間愛の一つの表われは、次のようなことでわかるだろう。それは小学生のころである。「ある同級生が赤いシャツを着てきたので、みんなにひやかされ、その子がべそを書いたのを見て『おれも赤シャツ着てくるから、いじめるならおれをいじめろ』」といったこと、道でバッタ（メンコ）をして遊んでいた子が荷車で手をひかれ血がポタポタ流れるのを見て、むちゅうになってかけより『痛かべ、痛かべ』とその指を吸ったことをつたえている⁽⁹⁾。

このような逸話が語る石集めの冷さを一風感じさせる「石ッコ賢さん」少年の内奥には、正義感や思いやりというものがあった。まさに、人間愛と自然愛とが分ちがたく美事に融け合っていたのである。賢治自らが石集めに熱中し、周りの人の愛に育まれる中で実存的動機づけという自分自身の現実的、人間的な願いの実現過程を体験したことが、生態的象徴としての「おもむき⁽¹⁰⁾」（風土性）を与えているものと考えられる。

(2) 兄妹とのほらかなる愛

賢治の人間愛が象徴的に表出したのが、妹トシへのあふれる愛のふるまいであり、詩作である、と考える。賢治と妹トシとは、実の兄、妹を越えた同朋^{どうぼう}の愛の如く、相互に理解し合い、支え合い、痛みを分かち合う仲であった。

この人間愛は、宗教的であり、神秘的でさえあったように思う。これは、血・肉を分かち合うような一身体といふようなものである。

トシが、生まれたのは、1898(明治31)年11月5日で、賢治の2歳年下である。宮沢賢治全集、第14巻年譜(1181頁)には、トシの記述が多く見られる。これは、賢治の生きた道に大きななかかわりをもっていった証明であろう。

「トシ7歳、花巻川口小学校1年」という記録からはじまり、トシの成績は2年以降全教科甲であった。

トシ13歳で花巻高等女学校に入学、終始首席をつとめる。

そして、17歳の時、日本女子大学家政学部に入學、寄宿舎貫善寮に入る。トシ18歳の時、日本女子大学の講堂でノーベル賞受賞者インドの詩人タゴールの自著の一節「ギタンジャリー」の英語・ベンガル語の朗読を聞く。この講演は、人間と自然と神々との生き生きとした交感、共生をおだやかに唱えるもので深い感動を与えた⁽¹¹⁾。

当時、農村地域から東京に出て大学に入学することは、殆ど不可能であった。学校の成績だけでなく、経済的負担があったからである。

1918(大正7)年、トシ20歳の時日本女子大学在学中妹トシから兄賢治あての手紙が唯一これだけ残されている。

この手紙は、兄賢治へのトシの近況を知らせながら、自分の悩みや進路や職業選択のことなどを尋ねているのである。

20歳の本学の短大生とは比較する余地がないと思うが、大正デモクラシー抬頭する大正末の一人の女性として、一人の人間としてのトシの生き方の一端を読み取ることができよう。その意味で長文であるが全文引

用させていただく。これは、また、賢治の環境世界の一断面を象徴的にとらえることができる、と考えたからである。

お手紙まことに有難く拝見仕り候、御風邪もおなおり遊ばしたる由何よりの事と存じ上げ候

論文の事も御心配下され有がたく存じ申し候

余り意気地なき事に候へと其後あの論題はとても短いあいだに力及ばぬ事とあきらめて今度ハ全く方面を変へる事にいたし候 いづれ食物の事住民の事衣服の事ハ卒業後も永く心がけてしらべ少しにても改め度く望居り候

今度の題ハ未だ確実にはきまり申さず候へどとにかくこれから何もない頭にて作り出すにて候へばなかなか頼りない事御座候

さて一生の仕事を選ぶ事についてハ家としても亦私としてもいつかは定めるべき事に御座候 本当のところ肝心の事に呑気不精な私にハこの問題ハまだわからぬままに御座候

大正十年位までハゆるゆると御考へを練らるる事に賛成申し上げ候

ともかくも真生活の方法と職業との一致の外に望まじき生活法ハ考へられず候 一人一人も一家もその天職を見出して之を遂げたくと折角ねがひ居り候 現在の様な怠け者にハ随分心細く候へどもこの望みの空なるものとハ思はれず候 現に多くの困難や貧乏や病氣や孤独などと忍ばれて四十年一日の如く教育に我を忘れらるる校長先生が生きたる証明と敬はれ申し候 ともかく私もこれから怠らず成るべく早く然し焦らずにこれを見出し度く存じ候

無責任な理想を申し上ぐるならバ兄上様御自身の天職と一家の方針とが一致する事が何より望まれ候 家族が必要な援兵としてでなしに唯の足手まといとなる事ハお互ひに不本意なる事に御座候 この事ハ人ではなくこれから婦人自身の覚悟を要する事と思はれ候 一家の長としての心進まぬ働きを強いてまでも衣食の安全を求めたり着飾ったりする奇生婦人の一人にても多き程国家の不幸と存じ候 然し決して今の流行の思想にかぶれて婦人運動の何のと云ふ事にてハこれなく候 家政や家庭教育や意気地や皆立派なる働きの分担と存じ候

とんだ方へ入り候

只今としてハ御健康を増さるる事第一と存ぜられ候へば折々に運動を遊ばるる様願ひ上げ候

勝手な事申し上げ候 先づは かしこ
十一月廿四日

敏拝

兄上様

(年譜 P.503~504)

なんといっても、トシの気がかりは、兄賢治の体のことであり、健康をとりもどした喜びを冒頭述べている。後段には、兄賢治の才能、天職が必ずしも家の職業に一致しないことへの心くばりについて述べているのである。

トシは、日本女子大学終業式を間近にして、トシより父あての知らせで1918(大正7)年12月24日その夜6時の汽車で帰省するであろうと手紙を出している。なお、10日付で学費を受領したことも記してある。ところが、このあと発熱入院することになる。(12月9日)

12月26日資善寮寮監西洞タミノ先生より20日からトシ入院の知らせである。その知らせを受け、母イチと賢治はその夜花巻を発つ。そして翌12月27日朝10時上野駅につく。トシ入院中の病院の近い所に旅館を決める。永楽病院(東京帝国大学医学部附属小石川分院)は旅館から250mほどの近いところである。

1月15日母イチは、トシの容態が小康を得たので帰花する。賢治は引続きトシの看病をすることになる。賢治の献身的なまでの世話をしている様子を次のように述べている。

(前略)

病院で賢治がとし子さえ看病する有様をおぼろげにはいまも知っておりますが、便のしまつから服薬、またいちいちその日の状況を医師に問い合わせたり、青年のできないようなことを、実に克明にやられたのでした。いま目にはっきりするのは、便のしまつのときですが、他の入院患者が便所の手洗場に糞便をなげすてたりしていたのを賢治は黙ってしまつたりしているのを私はつくづく感心して見ていたものです。(年譜 P.518)

伝染病室にかかわらず賢治は、部屋に入りこんでその世話して様子には驚いていたということを主治医の二木博士が青江舜二郎氏に語った中に次のような会話がある。

「しかし、ともかく、兄が妹の両便まで世話することは、ずいぶん異常ではありませんか。感染といえればそれはいちばん危険なことでしょう。」

「それはまアそうです、そういう事例はほかに全然なかったわけじゃない。中には、女の方から兄さんと呼んでけれ。兄さんでねば、下のめんどろを見

られるのはやんだ……⁽¹²⁾」

この会話にあるように、兄賢治と妹トシとは、兄妹をこえた純化された人間愛という情念につつまれていたことが想像できるのである。

(3) トシの死

1919(大正8)年1月のはじめトシの血液検査では、心配された腸チフスでないことが判明した。しかし、熱の理由は悪性のインフルエンザ、肺炎の浸潤によるものと危惧された。1月10日には、平穏にて重湯の中に少しだが飯粒をまじえた甘藷とうらごしたものを食べる。

1月トシの容態が小康を得たので、上京以来はじめて賢治は、上野公園にある帝国図書館へ行く。

1月の中旬、トシは、便通もあり食欲もましてきた。父政次郎の棉花するようにいわれたが一人でベットから下りて、歩くことができなかつたのですぐ帰れなかつた。なぜ突然の棉花を命じたのか、不可解であるが、当時の父権の強さを伺わせるものである。

同年2月下旬には、トシの病状が快方に向い退院することができた。母イチ、叔母岩田ヤスが上京する。3月3日ひなの節句を祝い3人付添って棉花する。勿論賢治も一緒であった。

3月4日には、トシが賢治にあてた手紙の中の「現に多くの困難や貧乏や病氣や孤独などと忍ばれて四十年一日の如く教育の我を忘れらるる校長先生が生きたる証明と敬はれ申し候」という日本女子大学創設者成瀬仁蔵校長が永眠する。トシは、尊敬する成瀬校長の死をどんなんか悲しんだか解らない。9日の告別式に出られなかつた。

トシは、帰家後、臥床静養につとめる。3月末には日本女子大学賞善寮寮監西洞タミノがトシの卒業証書を届けてくれた。大学の3学期欠席したが見込点がつけられ、優秀な成績で卒業した。西洞タミノは、早く卒業証書を見せたい、病後の様子を知りたい一心で花巻まで来たのである。ここにも教師と教え子との人間愛を見ることができると。

1919(大正8)年トシ快癒し、家業を手伝う。

1920(大正9)年トシ22歳の3月日本女子大学の級友加用とき子に近々上京できると報じたが、残念ながら叶えられなかつた。

同年9月24日付で母校花巻高等女学校心得となり、英語と家事を担当する。

このころ賢治は、島地大等や高知尾智耀の教えに傾倒し、いよいよ信仰に篤く、仏法の道に進む。そして、父親から反対をもおしきって法華經の教えに身をおくようになる。賢治25歳(1921)の時に父母との改宗をめ

ぐる議論・対立があつた。容易に改宗の妥協点を見つめることはできなかつた。

また、このころ賢治は、「農民芸術概論」や「春の修羅」などの作品を出すようになる。

トシは学校の依頼で英語教師斡旋のため、母校日本女子大学を訪ねた。その後、病氣再発により、1921年9月12日付で学校を退職し、1922(大正11)年7月にトシを下根子桜の別宅に移す。それは、母が看病疲れて床につくようになったからである。そしてトシの面倒は、トシの妹シゲが看病する。

1922年11月27日、みぞれの出る寒い朝、トシの脈搏甚しく結滞し、賢治は最愛のトシを見守り、いよいよ臨終に近づいたとき、トシの耳元でお題目を叫び、トシは二度うなづくようにして午前8時30分24年の生涯を閉じる。

父政次郎にとってトシは、自慢の娘であつた。母校花巻高等女学校に教師になったときは、大層喜ばれた。しかし、臨終にあたって

「(前文略)その愛娘がながい闘病生活にあえぎ、いま死へ向かおうとするのを見ては、哀れで言うすべもなく、思わず「とし子、ずいぶん病氣ばかりしてひどかつたな。こんど生まれてくるときは、また人になんぞ生まれてくるなよ」となぐさめた。トシは「こんど生まれてくるたて、こんどはこたにわりやのごとばかりで、くるしまなあよに生まれてくる」と答える。また母は愛情のこもったことばで娘をなぐさめる。(後略)」(年譜 P.556)

トシの死が告げられるや母はトシの足元で泣きくずれる。妹シゲとクニは抱き合つて泣いた。

賢治は、押入れに首をつつこんで慟哭する。そして、悲しみの中で愛と惜別の詩を誦上げた。それが「永訣の朝」「無声慟哭」「松の針」である。この三つの詩は、日本近代詩の上に残す傑出した作品である⁽¹³⁾、と小西正保は評している。

ここで、すべて載せることができないので「永訣の朝」の詩を載せることにする。

永訣の朝

きょうのうちに
とおくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
(あめゆじゆとてちてけんじや)^(註1)
うすあかくいつそ陰惨な雲から
みぞれがびちよびちよふつてくる
(あめゆじゆとてちてけんじや)
青い蕪菜のもよりのついた

これらふたつのかけた陶碗とうわんに
おまえがたべるあめゆきをとろうとして
わたしはまがつたてつぼうだまのように
このくらいみぞれのなかに飛びだした
(あめゆじゆとてちてけんじや)
蒼鉛そうえんいろの暗い雲から
みぞれはびちよびちよ沈んでくる
あめとし子
死ぬといういまごろになつて
わたくしをいつしようあかるくするために
こんなさつぱりした雪のひとわんを
おまえはわたくしにたのんだのだ
ありがとうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまつすぐにすすんでいくから
(あめゆじゆとてちてけんじや)
はげしいはげしい熱やあえぎのあいだから
おまえはわたくしにたのんだのだ
銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
……ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまつている
わたくしはそのうえにあぶなくたち
雪と水とのまつしろな二相系にそうけいをたもち
すきとほるつめたい雫にみちた
このつややかな松のえだから
わたしのやさしいもうとの
さいごのたべものをもらつていこう
わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ
(Ora Orade Shitori egumo)^(註2)
ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あああのとざされた病室の
くらいびやうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどもまつしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ
(うまれでくるたて
こんどはこたにわりやのごとばかりで
くるしまなあやうにうまれてくる)^(註3)

おまえがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになつて
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

(1922, 11, 27)

4 実践と科学との結合

前節までは、賢治の幼き日から成人に至るまでの生きざまにふれた。その一つは、賢治の自然との出会いによる自然との交感体験、科学的探究における感性から認識への統合される環境世界を見つめてきた。

その二つは、賢治自身の人間関係を純化させる人間の動機と妹トシとの愛の表象される人間愛にあふれる環境世界をながめてきた。

ここでは、農民を友とし、農民と共に生きるための科学と芸術の結合した環境世界を創造する過程を見ていくことにする。

(1) 農学校教師としての賢治

賢治が最終的に辿り着いたものが農民への愛と農業を科学する心をついに統一することであった。盛岡高等農林学校という最高学府に学んだ農芸化学なる科学が学問的レベルに留まっていたのでは、科学のもつ意味が薄弱となる、と賢治は自省したのであろう。

賢治は、農業高校生や農民と向い合ったとき、科学のもつ人間的な存在意義が浮び上がってくる。自らの科学的素養、学問的知性が、単に学問の下僕になっては終りだと考え、科学が実践の場に生かしたり、人間の生き方に貢献したりすることを目指した。まさに、これは、科学の人間化にほかならない。

1921(大正10)年12月から大正15年3月まで足かけ5年間稗貫郡立稗貫農学校(後に県立花巻農学校と改称(1923(大正12)年)の教師になる。教師になった動機は、就職の定まらない兄賢治に、妹トシの推めがあったからである。

農学校の賢治の給料は8給俸(80円)である。担当科目は、代数、農産製造、作物、化学、英語、土壌、肥料、気象等、ほかに水田稲作の指導であった。農学校教師の仕事は超人的なものだ。不平などはいわずに前向きに勤めている。教師の仕事は順風満帆のようなものではない。心の葛藤、懐疑といったものを持っていた。賢治は、高等農林学校時代の文芸同好会仲間であった保阪嘉内(山梨県北巨摩駒井村)に学校の近況

(注) (1)あめゆきとってきてください
(2)あたしはあたしでひとりいきます
(3)またひとにうまれてくるときは、こんなに自分のことばかりでくるしくしないように生まれてきます

を次のように知らせをしている。

「毎日学校に出て居ります。」「しきりに書いて居ります。」「愛国婦人といふ雑誌にやっど童話が一二篇出ました。」「学校で文芸を主張して居ります。芝居やをどりを主張して居ります。」「授業がまづいので生徒にいやがられて居ります。」(年譜 P.542~543)
就職早々の賢治の期待感と緊張感の中で、授業内容が高度すぎてか授業についてこれない生徒がいたようだ。新卒教師がよく出会う風景である。「こんなに教材研究をして授業をしているのにわかってくれない」と自信をなくしていく教師がいる。

賢治は、授業をはなれて芸術に目を向けていく。そして、賢治が農学校教師時代に劇作とその上演にも力を入れている。例えば「コミックオペレット『生産体操』(のちに『饑餓陣営』と改題)」「植物医師」「ポランの広場」「種山ヶ原の夜」の4本立で上演された。

賢治は農学校に併設された「国民高等学校」において「農民芸術論」を講じた。時に1926(大正15)年である。大正末の暴風雨・コレラの侵入(大正11年)、関東大震災・米価高騰(大正12年)が起こった。糸価暴落・天然痘大流行・旱害(大正13年)そして、引き続き世界恐慌・大暴風・降霜・遠野大火災(61戸焼出)・旱魃(陸稲、野菜全域)(1927(昭和2)年)など次々に災難に見舞われた。

東北農村の疲弊は目を覆うばかりであった。

賢治は家業を継ぐことに大きな違和感を持ち続けてきた。賢治の家は、質屋で古着屋である。そこに来る農民を見つめながら密かに農民へのなんらかの深いかわりをもとうと心に刻んでいたからにちがいない。

農学校教師になって一層農業と農民に対する献身的な働きをすることへの決意が示され行動化されていく。

1926(大正15)年1月17日付で「国民高等学校」が花巻農学校で開校式が挙行され、入学生三十二名と記されている。開校された意図は次の挨拶の中にある。「最近成人教育の必要が叫ばれ又教育の都市集中が行はれ農村の荒廃を来してゐる為地方の中心人物を養成する必要がある。」(県学務課長)「国民高等学校は本県に於ける最初の試みで御当地の有志の援助と生徒諸氏の熱烈な御希望とに依り満足すべき状態の下に開校するに至ったのは感謝に堪えぬ。都会の商工業に於ては相当の利潤を得てあるが農村の疲弊困憊は極めて憂ふべき状態にある。其の開発と農村芸術の発達を図り地方文化向上のためにも地方産業の発展のために粉骨砕身奮闘を希望する」(学校長兼内務部長)一傍点筆者(年譜 P.602)

上記傍点の物語る東北地方全域、就中岩手県の農村

の荒廃、疲弊困憊は、極めて憂慮すべき状況にあった。農村社会としての生産基盤を確立するためには、若き農村青年の育成にあり、ということからこの学校が開校され、全県から推薦された青年35名(篤農家、青年団活動に熱心な人)が講義を受ける。

教育内容は、「教科目」と「課外講演」とがあった。教科目には、「農業経営法」「世界之大勢」「最近科学の進歩」「農民芸術」など15科目があり、課外講演では、「調和の必要」「緯度観測」など7講演があった。維持観測の講師には、世界的な有名な「Z項発見」の木村栄博士が当たる。

賢治は、ここでは「農民芸術概論」を講じた。この内容は、農民の生きる道としての科学、芸術を通して人間の生き方を学べるようにしたものであった。今日の総合科目に相当するもので、且、人間の生き方を探求するものであった。

「農民芸術論」の講義の主な内容を年譜(P.591~593)から抽出してみよう。

- | | |
|------|---|
| 第一回 | 「トルストイの芸術批評」と「最初の酒造り(五幕物の戯曲)」 |
| 第二回 | 「われらの詩歌」(万葉集、古今和歌集一首を引いて比較、岩手の童歌、民謡など) |
| 第三回 | 「水稻作に関する詩歌」 |
| 第四回 | 「稲の露」(稲と水分との関係) |
| 第五回 | 「宅地設計」(農家の構造) |
| 第六回 | 「農民(地人)芸術概論」ここでは「農民と云わず地人と称し、芸術と云わず創造といたい」としその序論「我等は一緒にこれから何を論ずるか」を講じ、「世界が全体幸福にならないうち、一人の幸福はあり得ない」と述べる。 |
| 第七回 | 第六回に引き続き「われわれは世界のまことの幸福を索ねよう。求道すでに道である」と講じる。 |
| 第八回 | 「農民芸術の興隆」「農民芸術の本質」 |
| 第九回 | 「農民芸術の分野」 |
| 第十回 | 「農民芸術の主義」「農民芸術の製作」 |
| 第十一回 | 「農村芸術の批評」 |

講義は農民芸術論で各村から選抜された優秀な生徒ということで積極的に講じた。ただし「正直言ってよくわからなかった。だれもそうだったと思う」と生徒は回想している。賢治は、この講義に自己陶醉し、彼の真実を語っていったことが想像にかたくない。

賢治は、農学校の生徒、昔の百姓とちがって科学的

にやるべきだ、家へ帰って働くことが一番だと論じていたという。

やがて、賢治は農学校教師を辞して、本格的に農民へ直接かかわり貢献すべく「羅須地人協会」を設立(1926(大正15)年)したのである。

(2) 農民との自己同一性

農学校教師を1926年3月31日をもって依願退職した。同年4月1日「岩手日報」朝刊に次の見出しのもと記事が載った。

新しい農村の／建設に努力する／花巻農学校／
を辞した宮沢先生

花巻川口町宮沢政治郎[↑]氏の長男賢治^{↑↑}(二八)氏は今回県立花巻農学校の教諭を辞職し花巻川口町下根子に同士二十余名と新しき農村の建設に努力することになった(中略)そして半年ぐらゐはこの花巻で耕作に従事し、生活即ち芸術の生がいを送りたいものです。そこで幻燈会の如きはまい週のやうに開きしるしレコードコンサートも月一回位もよほしたいとおもつてゐます。幸同志の方が二十名ばかりありますので自分のひたいにあせした努力でつくりあげた農作ぶつの面の物に交換をおこないしづかな生活をつづけて行く考えです。(以下略)(年譜P.593)

賢治の羅須地人協会でのなすべきことは、「あれもこれも」と夢あふれ大きくはばたいていた。農作業に、芸術的表現・鑑賞にと農民の生きがいを求め、農村社会の変革を目指していたのである。

教師をやめて、羅須地人協会を作ることを急いだのは、さまざまな理由があったと思う。その理由の一つは、ゆっくり思索したり、読書したり、芸術を考え、演じたりすることであった。もう一つの理由は、生家の後継ぎが弟清六に決ったことで、後顧の憂いなく、自分のなすべきことができる、と考えたからであろう。

これよりも、根本的な命題をもっていたのである。それは、幼き時から花巻周辺の社会構造にある一つの疑問を抱き続けたことである⁽¹⁴⁾。それは、当時の半封建的な農村地帯で高めるもの、貧しきものの格差があまりにも大きかったことへのこだわりである。自分の家は質屋と古着屋をしていたので、自然災害があらうと不作であらうと何の不自由はなかった。それだけ定期的におしよせてくる自然災害(冷害凶作、干魃)に幼い賢治の目には農民のために、農民の幸せのために、

農民と共に生きよう、という農民への自己同一性⁽¹⁵⁾を強く抱くようになった。まさに自己の独自性、独立性、主体性を農民に対置させ意識し理解した環境世界を形成していったのである。

賢治は、極めて多感であるが冷静で、秩序正しく判断する力量をもっていた。

賢治が盛岡高等農林学校で修得した科学的方法を生かし、羅須地人協会をつくり、農民一人一人の心を心とし、農業技術指導から土壌診断や肥料設計に奔走して歩いたのである。それは暑い日、晴れの日、雨の日、村から村へと農家を訪ね歩いて、農民の悩み、願いを聞き懇切な相談をしていた。

東北特有の冷害の大きな痛手を受けた小作農には、ことのほか親切に対応し、自分のことのように土地改良、栽培法の工夫について話し合ったのである。

肥料設計が実に2000枚(1927(昭和2)年)もあったといわれ、おそらく寝食の時間を割いてまでも設計書一枚一枚作成したものである。

設計書を書いて終りではない。いわゆるアフタケアをするのである。田畑に出かけて農民から作物の収穫の様子を聞き、思ったより多くの収穫があったときは共に喜びを分かち合い、そして、何一つ報酬を求めなかったのである。

「雨ニモマケズ(1931(昭和5)年)」と賢治の最後の作品「グスコブトリの伝記(1932(昭和7)年)」には、冷害にあえぐ岩手の風土・環境世界における農業と農民の現実的状况を比喩的に述べているのである。

「グスコブトリの伝記(文庫版54頁)」のあらすじは、次の通りである。(筆者要約)

グスコブトリは、イーハトーブの大きな森の中で生まれた。餓餓のため両親は森の中に消えていった。(これは口べらしのためであろう)

残されたのは妹リネ(9歳)とブトリ(12歳)の二人だけである。

雨が続き稲の葉が病気になり、もうだめだ、と思う。(冷害のためのいもち病である)

ブトリは、イーハトーブの町へ出て、クーパー大博士に学ぶ。そして、博士にイーハトーブ火山管理局を紹介してもらう。火山局技師ペンネナムに地震の噴火に生じる現象を尋ねる。

=あの恐ろしい寒い気候がくる=

「先生、気層のなかに炭酸瓦斯が増えれば暖かくなるのですか」

火山を爆発させたら、たくさんの炭酸ガスがでるでしょう。(地球温暖化を図ろうとする)

爆発させるには、危険がともなう
(わたしに それをやらせて下さいと)

この作品は、とても読み易く、全体として賢治の理想とする向日性を描いている。しかし、危険をおしてまで温暖化を図る火山の爆発に挑むブトリを単なる自己犠牲的側面から見るのではなく、グスコブトリの真の発想、生き方を読みとることが必要である。ここに登場するブトリは賢治で、リネは妹トシをイメージできる。この作品は賢治の苦闘の中でかかれたものだ。

ブトリの発想は、冷害から逃れられない農民への思いと同じように、賢治の羅須地人協会も、貧しさと本人自ら健康上の理由をあわせて「挫折」せざるを得なかった。1930(昭和5)年ごろ、過労と粗食ため体調をくずし、肋膜炎となった。

賢治はその挫折感の中にもなおかつ、孤独の中にも冷静に自己の生き方を見つめなおしていたのである。それが次節で述べる「雨ニモマケズ」である。

(3) 死線を超える体験様式

筆者は、毎年宮沢賢治記念館とゆかりの土地を訪ねたり、本をあさったりして、賢治の生きた環境世界を涉猟するのである。賢治の歩んだ道は、波瀾に満ちた人生であり、文字通り「修羅の旅」であり、生涯「自分探しの旅」であったように思われる。賢治が「雨ニモマケズ」の詩を書いたのは1931(昭和6)年11月3日であろう、といわれている。「雨ニモマケズ」手帳が発見されたのは死後2年後であった。

この詩をかいたころは、碎石工場の技師となり、肥料需要期を迎えて、石灰が肥料として売り出された時代。このことが契機に鈴木東蔵の依頼をうけて病弱の体をひきずるように上京し、その注文をとることになる。東京につくなり、駿河台の八幡館で高熱を出す。その時、賢治は死を覚悟して、両親と妹、弟に遺書をのこしている。急逝父が迎えに来て、父と共に帰花する。その後2年間病床につく。その間創作活動は続く。

1933(昭和8)年37歳の1月7日東京の菊池武雄にあてた年賀状と上京中世話になったことを次のように述べている。

やっと少しずつ下らない仕事をして居ります。しかしもう一昨年位の健康はちょっと取り戻せさうにもありません。それでもどうでもこの前より美しい本の数冊をつくりあげる希望を捨て兼ねて居ます。(年譜P.702)

ますます、病の中でも創作意欲がおとろえてはいなかった。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシズカニワラツテキル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ
東ニ病氣ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコワガラナクテモイイトイイ
北ニケンクワヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイイ
ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

(1931. 11. 3)

「雨ニモマケズ」の詩をめぐる二つの論評がある。中村稔は、次のように評している。

<「雨ニモマケズ」は宮沢賢治のあらゆる著作の中でもっとも、とるにたらぬ作品のひとつであろうと思われる⁽¹⁶⁾>つまり中村がいたいことは、みじめな敗残の姿であって、とても「生きている」ということは言えないのである、といいたいのだろう。

それに対して哲学者谷川徹三は、次のように評している。

<この詩を私は、明治以来の日本人の作ったあらゆる詩の中で、最高の詩であると思います⁽¹⁷⁾>

ここでは、二人の否定、肯定の再評論をするつもりはない。現にこの二人の評論は、評論として、筆者はあくまでも「雨ニモマケズ」がどうして生みだされた

か、生みだされた必然的な環境世界に光をあててみようと考えた。

1930(昭和5)年4月12日、東北砕石工場の鈴木東蔵に合成肥料の相談をうける。9月には資金調達、趣意書までかいて広告原稿の校正までした。1931(昭和6)年には砕石工場の工場技手か、技師の辞令を交付され、賢治は石灰岩を主原料とした製品改良することになった。以後、県内・外からの注文がくるようになる。しかし、前にも述べたように賢治は注文通りの旅先で倒れて東京から帰った。9月28日に迎えに出た弟清六は次のように観ていたのである。

青じろい顔ではあったが、ちゃんと服装にネクタイをつけ、実に容易ならぬ重態なのに若しくないふりをして、汽車から下りて、家につくやいなや病床に臥してしまった(年譜P.688)

病床にまで鈴木は、相談に来る。桑園の施肥の項中に炭酸石灰の蚕に及ぼす効果を書き足しを賢治は書くが、まだ、病癒えず、といった状況であった。次のような手紙を鈴木におくる。

「次ニ小生儀、起床歩行ニ勉メ候へ共、息切レ甚シク辛ク十数歩ニ達スルノミ有之丈夫ノ方ヨリ見テハ情ナキモノナレドモ如何トモ仕方無之候。」(年譜P.693)

このような病状にありながら、工場の相談にのった。これは、あくまでも賢治自身に与えられた農業危機の克服と農民への愛と癒しへの使命感、自己責任を果すべきである、という心くばりがあったからであろう。

1933(昭和8)年9月11日には、農学校の教え子(稗貫郡亀ヶ森小学校教師)から見舞状に返書が送られている。

私はお蔭で大分癒って居りますが、どうも今度
は前とちがってラッセル音容易に除こらず、咳が
はじまると仕事も何も手につかずまる二時間も続
いたり、或は夜中胸がびうびう鳴って眠られな
かったり、仲々もう全い健康は得られさうもあり
ません。けれども咳のないときはとにかく人並に机
に座って切れ切れながら七八時間はなにかして
るやうになりました。あまたがいろいろ想ひ出して
書かれたやうなことは最早二度と出来さうも
ありませんがそれに代ることは、きつとやる積りで
毎日やつきと居ります。

しかも心持ばかり焦ってつまづいてばかり
るやうな訳です。私のかういふ惨めな失敗はた
だもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふ
ものの一流流に過って身を加へたことに原因
します。僅

かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げて来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味わわともせず、幾年か空しく過ぎて漸く自分の築いてみた蟹気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従って師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。(中略)風のなかを自由にあるけるとか、はっきりした声で何時間も話ができるとか、じぶんの兄弟のために何円かを手伝えるとかいふやうなことはできないものから見れば神の業にも均しいものです。そんなことはもう人間の当然の権利だなどといふやうな考では、本気に観察した世界の実際の余り遠いものです。(中略)上のそらでなしに、しっかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならぬものは苦しんで生きて行きませう。いろいろ生意気なことを書きました。病苦に免じて赦して下さい。それでも今年も心配したやうでなしに作もよくて実にお互心強いではありませんか。また書きます。(年譜P.713~714)

長文と引用したのは、賢治が亡くなる10日前の賢治が教え子に語るが如く、我が人生をふりかえり人間としての生き方を綴話している。まるで教え子に遺言でも書くように語り論しているのである。同時に賢治はもっと生きたい、その願っているようさえ思えてならない。また、今年の稲の「作柄」にも心配りしているのである。

9月20日、前夜の冷気がきつかったのか、呼吸が苦しくなり容態が急変した。花巻病院から来診があり、急性肺炎とのことである。政次郎是最悪の場合を考えざるを得なくなり、心の決定を求めの意味で親鸞と日蓮の住生観を病床の賢治と語り合う。

その夜短歌二首を半紙に墨書する。これが最後の歌となる。

夜七時ごろ農家の人が肥料のことで相談にきた。どこの人か家の者にはわからなかったが、とにかく来客の旨を通じると「そういう用ならぜひあわなくては」といい衣服を改めて二階からおりていった。玄関の板の間に正座し、その人のまわりくどい話を聞いて聞いていた。……(以下略)(年譜P.715) 家の人はみないらいして、早く切りあげればよいと焦っていたようだ。話は1時間ばかり続いた。その人

が帰ると急いで賢治を二階に抱えあげたのである。

賢治の身は、既に最悪の状態でありながら農民の作物のこと、肥料のこと、心配ごとが、我が身の如く、相互に痛みを分かち合い、生きようとする願いを共有しているのである。まさに、農民との自己同一性を死の直前にも確かなものにしていったのである。

死の直前に父政次郎と賢治とは、過去のしがらみ、葛藤を払拭するかのように語りかける。

「賢治、なにか言っておくことないか」

「おねがいがあります」

「そうか、ちょっと待て、いま書くから」

と、国訳の妙法蓮華経を1000部つくること、「正しい道に入られますように」ということを伝えた。これは、まぎれもない遺言である。

賢治の農民と共に生きよう、農民のためにありたいという感性と理性はとぎれることなく、死線をさまよいつつも、その体験様式＝環境世界は、確立され、昇華されていったのである。

エピローグ

今の環境問題は、人類未曾有の危機をもたらしている。

それは、人類の生存性、人間の尊厳性にかかわる重大且深刻な問題である。この危機は近代物質文明のもつ非人間性、非理性によるものである。今日の自然と人間の危機を克服する道は、我々の居住する環境世界＝風土を原点とした、人間そして生きとし生けるものすべての生き方、在り方を自然システム、循環システム、環境バランスを基軸にした限らない抑制と保全の立場からの生活の質を変える価値倫理を確立することである。

その価値倫理の確立には、賢治の象徴的・生態的な環境世界を再評価し、学んでいく必要があると考える。

私達は、「いま、ここにある (here and now)」という現実的に存在する環境世界に、主体的にかかわり「ジブンヲカンジョウニ入レズニ／ヨクミキキシワカリ／ソシテワスレズ」自らが自らのとりまく環境世界に問い続け、感性と理性をもって、他者との共生、積極的な社会への参加貢献することである。

私達は、他者から、環境から逃避してはならない。

他者を、環境を自分のことのように考え、それらを支えていく力をつけていくことが大切である。他者、環境とかかわる時間と空間の生きる過程に組織される自我の体験様式を確立していくことである、と考える。

筆者は、本稿をねるのに多くの著書に出会って、学

ぶところが多々あり、「あれも、これも」と資料を収集した。しかし、その中から論題を構成する論述は、極めて少なかった。

本稿に特に有用な資料は、前にも述べているように「校本宮沢賢治全集第14巻(年譜)」に負うところが大きかった。

本稿では、できるだけ「原資料」としての価値ある年譜にもとづき、できるだけ全文丸ごと引用し、考察させていただいた。同様に、引用した詩も全文載せさせていただいた。部分引用で、部分考察では、論題の賢治の環境世界を把握することができない、と考えたからである。

尚、本稿は、1998. 1. 10日本女子大学の最終講義の内容を補筆したものであることを付け加えさせていただく。

(注)

- (1) 今西錦司「生物の世界」講談社学術文庫 1962 P.51
- (2) オギュスタン・ベルク／篠田勝英訳「地球の存在の哲学－環境倫理を越えて」ちくま新書 1996 P.9～10
- (3) 和辻哲郎「風土－人間学的考察」岩波書店 1935 P.2
- (4) (3)前掲書 P.16
- (5) E・H・エリクソン／小此木啓吾訳編「自我同一性－アイデンティティとライフ・サイクル」(PSYCHOLOGICAL ISSUES IDENTITY AND THE LIFE CYCLE) 誠信書房 1973
- (6) 宮城一男 1983 P.272
- (7) J・S・ブルーナ／田浦武雄・水越敏行共訳「教授理論の建設」黎明書店 1966 P.127 (By Jeromes S. Bruner TOWARD A THEORY INSTRUCTION)
- (8) 久慈力「宮沢賢治－世紀末を超える予言」新泉社 1989 P.29
- (9) 青江舜二郎「宮沢賢治－修羅に生きる」講談社現代新書 1974 P.27
- (10) (2)前掲書 P.104～106 (オギュニスタン ベルクは「おもむき」を風土性といっている。日本語の「おもむき」とは、心の動き、意味、物事のなりゆき、しみじみしたあじわいなどと解されている。ベルクの「おもむき」は頭のなかで意味を持ち、他方で事物を手にしていくというわけではない。私たちは身体のかで事物の「おもむき」を生きている。人間

の存在は、風土の中に引きいれられて実践的行動に
事実と象徴とが結びついて表出するのである。

- (11) 青木生子「近代史を招いた女性たちー日本女子大
学に学んだ人たち」講談社 1990 P.189
- (12) (9)前掲書 P.27
- (13) 小西正保「わたしの宮沢賢治論」創風社 1997
P.34~44
- (14) (9)前掲書 P.152 青江は「賢治は羅須地人協会
時代において、まぎれもなく労農派のシンパであり
協会はその運動実践のためのものであった。」と指摘
している。これは、農学校教師になり、鋭い感受性
で、農業や農民への自己同一性につながる主体的実
践行動にほかならなかった。
- (15) (5)前掲書 P.10 エリクソンは「自我が特定の社
会的現実の枠組みの中で定義されている自我 a
defined ego へと発達しつつあるという確信である。
そして、私はこの感覚 sense を自我同一性 ego iden-
tity とよびたいと思う」と述べている。
- (16) 中村稔「宮沢賢治ふたたび」思潮社 1994 P.173
- (17) 谷川徹三「雨ニモマケズ」講談社学術文庫 1979
P.10